

来る2030年、深刻化が著しい少子高齢社会は歯止めがきくこともなく、3人に1人が65歳以上の高齢者という時代を迎える。人々の健康を守る地域医療の需要は増す一方と考えられる。また、噂まじいスピードで広がるグローバル化により、現在流行中の新型コロナウイルスのような、未知の感染症が流行する可能性も否めない。つまり、医療現場は前代未聞の難題が山積になると推測できる。では、2030年の地域医療をより良い環境にするために、何を行うことが出来るだろうか。

まず、現在も行われている、行政との連携や医療資源を有効に活用できる環境作りを継続していくことである。健康を築くのは日々の生活であるように、良い医療現場を築くのは、基礎基本の徹底が出来ている日々の医療現場である。大きな難題が目の前に立ちまわると、それに気を取られてしまいがちだ。しかし、誰でも医療を安心して受けられる環境を「守る」ことを決して忘れてはいけない。

加えて、多くの人に瞬時に伝わるデジタルと、誰でもわかりやすいアナログの両方を駆使した、地域医療と地域住民の連携を一層強める情報共有体制を確立するべきと考える。高齢化が進む今、重要なのは高齢者が健康でいられる環境をつくることだ。病を患ってから行動を起こすのではなく、事前に予防医学として健康的な食生活や運動を促進していくことが求められよう。また、SNSが広く普及している現在、感染症が発生すると誤った情報が瞬く間に広まってしまふことがある。まるで伝言ゲームのように、軽はずみな憶測や推測に尾ひれがつき、事実と全く異なる形で認識されることも珍しくない。そこで、人々にと、一番身近な医療機関である地域医療が、正確な情報を適切な形で届けることが不可欠だと指摘したい。デジタル化が急速に進む現代だからこそ、正しく情報を発信する体制を今一度、「創る」ことが欠かせないと考える。

このように、私は基礎基本とされる良い医療環境作りの徹底、及びデジタルとアナログ双方を用いた適切な情報共有体制の確立が重要だと提言する。どちらの考えも強い解決力がある、たり、奇抜で目を引いたりするような案ではない。しかし、強固に築かれた土台は決して揺らぐことがないと信じて疑わない。予想だにしない問題が起きたとき、堅実なこの環境は、確実に医療現場を助けると確信している。そして、このような環境が整っているとき「医は仁術なり」という言葉のように、地域医療は人々の病気や怪我を治すだけでなく、人々に幸福を届けることにつながり、いくと考える。

10年後の未来、何が起こり何が求められているのか、誰も知り得ることはできない。だが、何が起きても対応できる環境を築くことはできる。私の考える2030年の地域医療へ守り・創ることは、未曾有の難題も解決できる医療環境である。